



引きこもり少女を親に隠れて洗脳レイプし  
思い通りの愛奴隷にする話

ジャンル：ビジュアル小説



「あぁっ あぁ… もうっだめええっ!!  
そこはっ あっ あっ あぁっ イグっ イっちやうよおっ!!」

「いけいけ、イっちまえっ! 精液ほしいんだろがっ  
腹が裂けるほど飲ませてやるっ!!」

中年の腰の動きがさらに激しさを増し、  
真理の理性も身体も徹底的に壊しにかかる。

「んっ!! んぁぁっ! あっ あぁっ! イグっ! イグうっ!!」

真理の悲鳴は断末魔のように張り裂けていた。  
何度となく腰い挿かる絶頂に全身を震わせ、  
失神しそうになりながら、ただひたすら奇声を上げた。

中年ももう限界なのを強を噴きながら叫びを上げた。

「出してやるっ。出るぞっ 出るぞっ! 出すぞおおおっ!!」

「ぎでっ 早くっ 早ぐううっ!!  
あっ あっ ごわれるっ 壊れちやうからぁぁぁ!!」

「噴らえええええっ!!」

中年は腰を一度引いてから、一気に真理の身体を串刺しに貫いた。  
そして、その子宮へ噴水のような精液を熱く遊らせた。

ドビュウウウウウウウツツ!!  
ドビュウ ドビュウ! ドビュウ ドビュウ!!

「あぁぁっ!! あぁぁぁっうんうううううっっっ!!」

電流が子宮から脳天まで貫いたように真理の身体は跳ね上がって、  
仰け反ったまま硬直した。

次々と子宮へ吐き出される精液は膣の中から溢れ出て、  
その中を完全に満たした事を理解させた。



「痛くて痛くてしょうがないか、真理」

真理が静かに首を縦に振る。  
開放して欲しいと懇願してるようだ。

「だが、お前の体は苦痛に震えてるほうが綺麗だ」

じつくりとその肢体を凝視する。

「こんな綺麗なものを見せたいなんてもったいない、  
男ならみんなお前を犯したいと思うぞ。お前はかわいいからな」

「んふっ んふ……」

「特にこの乳房。お前の年にしては本当に大きいな。  
乳首も綺麗な色をしている」

そういって手で乳房を下から持ち上げるように震わせた。

「んぐっ!? んぎうっつ んぎっ」

真理が苦痛に苦悶の声を漏らす。  
大きな乳房は震え続け、苦痛を味あわせ続けた。

「ああ、すまなかった。  
乳首を針で貫かれて重しをつけられては激痛が走るだろうからな。  
だが、こうたって——」

今度はチェーンを引っ張った。

「ひぎいっ!? いぎいっっ!!」

「これの方がもっと痛いな」

乳首を引っ張られ、真理の全身から汗が噴出す。  
息は荒々しく、この拷問の苦しさを示していた。



「シンっ!？」

中年の方が舌を真理の背中に這わせ、驚いた真理が飛び上がる。

「いやぁ、若い肌はきめ細かくてやわらかくておいしいですなぁ。この味だとまだ三学くらいでしょうか」

「僕はおっぱい吸いますよ んちゅっ」

「んぁっ いやぁんっ」

男達の舌攻撃に真理が悶える。  
いやがっているが、オレの命令に拒否はできない。  
ただひたすらしゃぶられ続けるしかない。

「んんっ あうう……」

真理は嫌悪感に悲鳴を上げていたが、こんなのは前戯で済まない。  
男達は笑顔でオレの方に振り向いた。

「いやぁ、ずいぶん素直でいい子のようですなぁ。  
さっそく、こっちの方も楽しませてもらいたいんですが……」

中年が自分の下腹部を指差す。

「いいですよ。ですが、服は全部脱いで全裸でやってください。  
カメラなど隠されているとね、いろいろ残されるとこちらも  
困りますし、リスクも負ってもらわないと。  
純粋に楽しんでくれる人じゃないと、この子は貸せませんよ」

「わかりました。わかりました。  
ここまで来てそんなことで引きませんよ。なぁ」

「はい隊長。  
でも、本当に何してもかまわないんですか？」

「傷が残らない程度でね」

男達はさっそく服を脱ぐと、その辺の枝や茂みに引っ掛ける。